

1953.
 18) Berger: Chirurg, 23, Jahrg. Heft, 12, 552.
 19) MacGillivray: B. J. of Surg., 46, 180, 1958.
 20) Conn: J. Clin. End., 5, 247, 1945.
 21) McMillan: Am. J. Surg., 82, 759, 1951.
 22) Forshall: Brit. J. of Surg., 40, 181, 1952.
 23) Whipple: Surg., 46, 289, 1958.
 24) 沖中: 日本内分泌学会総会, 1958. (沖中による).
 25) 清野: 日内会誌, 20, 155, 1932.
 26) 稲見: 精神神経誌, 41, 691, 1936.
 27) 高木: 外科, 10, 91, 1948.
 28) 浪久: 東医事新誌, 68, 56, 1951.
 29) 郭: 外科, 13, 288, 1951.
 30) 石崎: 東医事新誌, 68, 4, 1951.
 31) 黒羽: 日病会誌, 41, 477, 1952.
 32) 高木: 日消会誌, 49, 55, 1952.
 33) 高木: 日外会誌, 55, 626, 1954.
 34) 井上: 精神神経誌, 55, 529, 1953.
 35) 齊藤: 日病会誌, 43, 314, 1954.
 36) 佐藤: 精神神経誌, 57, 38, 1955.
 37) 前沢: ホルモンと臨床, 4, 527, 1956.
 38) 花園: 米子医学雑誌, 7, 171, 1956.
 39) 蓮沼: 日内会誌, 44, 1128, 1956.
 40) 安倍: 九州神経精神医学, 7, 249, 1959.
 41) 更井: 脳と神経, 12, 177, 1960.

医学書院/出版だより

「新しい外科管理」

東京女子医科大学教授 榊 原 仟

手術といえは、かつて電光石火の早技を要求され、熟練ということが患者の予後に重大な関係をもっていた。

しかし術前・術中・術後の管理が長足の進歩をとげたため、術者は、手術の目的を理解し、その目的に最も適するように切開し、縫合するという技術を繰返せばよいという状況になり、術者の熟練があまり患者の予後を左右するということがなくなった。

患者の予後は手術者の熟練度よりは、手術前後の管理者の熟練度により多くゆだねられて来たのである。

実に術前・術中・術後の患者の管理が手術の主体をなすといつてもよいほどである。

しかるに、この方面の進歩は著しく、文字通り日進月歩の有様で、総括的に理解するには、多くの文献を手当たり次第に読まねばならず、多忙な実地医家にとっては容易ならざる状態にある。この時に当り、「新しい外科管理」なる書籍が発行せられた。まことに多くの外科医の渴望に答えたもので、極めて時宜に適したものと、まずその企画に敬意を表したい。一読するに術前・術中・術後の管理に関し、極めて実地的な問題を取りあげ、具体的に、しかも簡潔

には書かれておりながら詳細に論じ尽されている。

おそらくは青柳、木本両教授の編輯方針が、当を得ていたためであろう。執筆者はそれぞれの分野の専門家であるから、得てして冗漫な記述になり勝ちなものであるが、それを押えてこの様に簡潔なものとされるには非常な苦心を払われたことと思う。その結果、多忙な外科医が、寸暇をさいて一読せば、直ちに正しい管理法が理解出来るようになっており、これが本書の素晴らしい特色の一つである。

一般的な状態における手術時の管理はもとより、例えば新生児、未熟児、高齢者などの管理についても別項をさいて詳述してある。或は治療そのものの合併症、例えば輸血、放射線療法などの合併症およびその対策が論ぜられている。術中に起き得る危険、例えば心停止に対する蘇生法が書かれてあるかと思えば、術後の患者の体位、離床のさせ方などに至るまで詳細に記し、かゆい所に手がとどくといった感じがする。

総論的な管理を述べた後、各種の疾患に対する手術前後の管理を取りあげ、極めて具体的に、どういう風にすべきか、その理由までが書かれているといえは、本書の内容は想像

がつくに違いない。

例えば乳癌手術後の上肢の運動障害を残さないようにするには、いかなる運動をさせるべきかというようなことを図を以て示しているなどは如何に術後管理法を広義に考え、しかも実地に即して教示しているかを示すものといえよう。

いわゆる術後症候群、一例をあげれば胆嚢剔除後症候群の如きものについても発生防止、治療などを示し実際に手術にたずさわる者に適切な助言を与えてくれる。部分によつては診断の点にまで言及して、その点から術中管理を論じたものもあり、親切丁寧である。

最新の手術をも網羅している点も本書の特徴で、人工臓器にまで言及してあるのには驚かされた。

この様に本書は出るべき時期に出され、われわれ外科医の知りたいと思う点をあらゆる角度から、親切丁寧に教示してくれているもので、外科医たるものはぜひ座右に置くべきものと考えてのである。

しかし初めに書いた様に、この方面の進歩は極めて著明だから、今日の新知識も明日には古いものになる恐れはある。だからたえず改版して常に新しいものにしておいてほしいという点を特に望む次第である。